

【うたた寝】 うたたね

かつて私はある茶会のお手伝いで、裏千家十二代又抄斎作の「うたたね」という銘の竹茶杓で点前をさせて戴いたことがありました。この茶杓、棗の上では座りがよいのですが、畳に置くと權先が上を向かず転んでしまうという珍品です。勿論、銘はこの特徴から付けられたのです。席主の「心清らかに置くと倒れないそうです」という冗談に、連客は微笑みながらも畳目の谷間をねらって懸命に置きはじめ、なかなか拝見が終わらなかったことがありました。

・ たらちねの親のいさめしうたゝ寝は物思ふ時のわざにぞ有りける

『拾遺集』 読人しらず

母親から注意されたうたた寝は恋の物思いに耽るすべだったと告白した歌です。

うたた寝は眠りの浅い夢を見やすいレム睡眠の状態にあります。

母親でも立ち入ることのできない夢という秘密の場所で、思春期をむかえた彼女は甘酸っぱい初恋の思いに浸っていたのです。

うたた寝といえ小野小町を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。

- ・ 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを
- ・ うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき

夢の歌人といわれる小町は夢の中で彼氏と会うことを楽しみにしていたようです。

現代の歌謡曲にも「夢で会いましょー♪」「夢でもし会えたらすてきなことねえ♪」といった類の歌詞はよく耳にしますが、小町にとって夢の世界は現代人よりはるかに切実・深刻であったと思われまふ。なぜなら古人にとって夢の世界は現実の世界と同等の価値があったからです。

本稿では以下も茶の湯には馴染まない恋歌が続きますが、私が書きたいのは恋心ではなく魂のあり方だにご理解いただきお許しくください。

・ 恋ふれども逢ふ夜のなきは忘れ草夢路にさへや生ひしげるらむ 読人しらず

[愛しているのに夢でさえ会えない。夢にまで忘れ草が茂りあの人は私のことを忘れたからでしょう]

・ 夢にだに会ふことかたくなりゆくは我やいを寝ぬ人や忘るる 読人しらず

[夢の中でも会えなくなっていく。それは私が寝むれないためか、あの人が私のことなど忘れたからなのか]

・ 夢にだに見ゆとは見えじ朝な朝な我が面影に恥づる身なれば 伊勢

[夢の中でも見られたくない。日に日に美貌が衰え恥じている私なのだから]

これら『古今集』の歌で明らかのように、古人にとって夢の中に愛する人が現れることは自分の思いの結果ではなく、愛する人の魂が自分の夢の中にやって来たのだと捉えていたようです。

更に古く『万葉集』防人歌に、

・我が妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えてよにわすられず

〔妻は私のことを思っているらしい。水を飲もうとすると妻の姿が映って忘れられないことよ〕
防人に召集され再び戻ることがないであろう夫を案じ、妻の魂が彼方からやって来て面影を飲みに映したというのです。

この歌には巷に氾濫する恋・愛などという軽い言葉と同等には語れない、古人の魂の凄まじい力強さが感じ取れます。

魂の存在を強く信じる者にとって夢や幻は魂の具現であり、夢は人生の大切な一コマだったので

す。
さて、あなたのうたた寝にはどなたが訪ねて来るのでしょうか。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

～ Copyright (C) 2011 ～私の書齋～ 森田文康. All Rights Reserved.～